



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語結果構文の構文構築と軽動詞併合
Author(s)	邱, 林燕
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 24, 75-90
Issue Date	2017-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64763
Type	departmental bulletin paper
File Information	75.pdf



中国語結果構文の 構文構築と軽動詞併合

邱 林燕

邱

林燕

QIU Linyan

Formation and Structure of Mandarin Chinese Verb-Resultative Constructions (VR constructions)

QIU Linyan

abstract

This paper applies light verb merging theory to analyze the formation and structure of two types of resultative constructions (intransitive resultatives and causative resultatives) in Mandarin Chinese. We show that intransitive resultatives are divided into two types depending on whether the root verb (V) merges with the light verb BECOME or CAUSE, and causative resultatives can be formed only from those which merge with BECOME. We further show that subject NPs (causes) of causative resultatives are syntactically restricted by V. We therefore propose that, in the formation of causative resultatives, the root verb V which has merged with BECOME moves and merges with CAUSE. A major theoretical implication of the analysis is that it supports the claim that a phonologically empty light verb must become phonetically realized, thereby triggering movement (head movement) of the root verb (Chomsky (1995), among others).

1 はじめに

以下の例が示すように、行為と結果を複合した構造（Verb-Resultative Construction、以下、VR構造）を述語に持つ、いわゆる自動詞型結果構文（1a）と原因型結果構文（2a）が中国語には存在する。日本語や英語にはこれらに対応する表現が非文となることが多い（Cheng & Huang 1994、Sybesma 1999、Huang 2006、石村2011など）。

- (1) a. 张三 跑 累 了。
張さん 走る-疲れる-ASP
b. *張さんはクタクタに走った。
c. John ran *(himself) tired.
- (2) a. 马拉松 跑 累 了 张三。
マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん
b. *マラソンは張さんをクタクタに走った。
c. *The marathon ran John tired.

中国語に対応する日本語（1b）は、「走る」の意味概念に結果が含意されないため、結果構文として成り立たない（影山1996など）。他方、英語の結果構文には結果述語が直接目的語と叙述関係を持たなければならないという直接目的語制約（Direct Object Restriction）がある。そのため、（1c）は直接目的語となる「himself」がなければ非文となる（Simpson 1983、Levin & Rappaport Hovav 1995）。また、（2a）に対応する日本語や英語は存在しない（Huang 2006、石村2011）。この文では、動詞「跑（走る）」の対象が主語位置を占め、動作主が目的語になっている。そして非能格動詞「跑（走る）」が語彙的使役化を引き起こしているように見られると言われている（Huang 2006）。中国語の結果構文がこのような特徴を呈するのはなぜか、その形成と構造はどのようなものか、といった問題は興味深い課題であり、盛んに議論が行われてきた（Sybesma 1999、Huang 2006など）。これらの先行研究では、自動詞型結果構文の構造は一律に、主語が結果述語と叙述関係を持つ内項であるという非対格の構造とされる。そして、原因型結果構文は自動詞型結果構文に軽動詞CAUSEが加えられて成立する拡張型だとされている。本稿2節で述べるようにこれらの分析には問題が残り、成功しているとは言いがたい。

本稿はこの二種類の結果構文の形成と構造を、動詞Vと軽動詞（BECOMEかCAUSE）との併合を分析することを通して明らかにする。以下2節では、中国語の結果構文の形成と構造を分析する先行研究の代表としてSybesma（1999）やHuang（2006）を検討し、それらの問題点を指摘する。3節ではこの二つの結果構文の成立に関する記述的事実を考察する。4節では2節と3節の考察を踏まえ、Huang（2006）が主張する軽動詞併合の分析を押し進める。具体的には、自動詞型結果構文には、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合するタイプと軽動詞CAUSEと併合するタイプの二種類の構造があることを主張す

る。そして原因型結果構文の形成には、動詞VがBECOMEと併合してさらにCAUSEに上昇するというプロセスを仮定する。さらに、本稿が提案する構造の分析は、これまでの研究で問題となる言語事実を自然に説明することができ、理論的にも経験的にも支持されることを示す。最後に、5節で本稿の分析をまとめる。

2 非対格の構造の分析

Sybesma (1999) やHuang (2006) は、(1a) や (2a) のような結果構文の成立を統一的に説明しようとし、自動詞型結果構文の構造は主語を内項とする非対格の構造であると分析している。たとえば、小節 (Small Clause、以下SC) 分析を採用するSybesma (1999) は、自動詞型結果構文はその主語が結果述語Rと小節をなし、動詞Vが外項を取らない非対格動詞にシフトする構造であると分析する。軽動詞併合 (merge) 分析を主張するHuang (2006) は、自動詞型結果構文はその主語が結果述語Rと叙述関係を持ち、動詞Vが様態付加詞 (manner adjunct) として軽動詞BECOMEと併合すると主張する。

(3) 自動詞型結果構文の構造 (1aを例とする)

a. [VP 跑 [SC 张三 累了]] (Sybesma 1999)

b. [BECOME_(跑) [张三 <累了>]] (Huang 2006)

このようにSybesma (1999)、Huang (2006) は、分析のしかたがそれぞれ異なるが、共に自動詞型結果構文の主語は動詞Vと構造上の意味関係を持たないとする。そして主語が結果述語Rと叙述関係を持つ内項となり、非対格の構造を持つと主張する点で両研究は共通する。さらに、原因型結果構文に関しても両研究ともその主語が動詞Vと構造上の意味関係を持たないとする。そこでは自動詞型結果構文に軽動詞CAUSE¹が加えられ、それによって原因項が導入されると主張している。

(4) 原因型結果構文の構造 (2aを例とする)

a. [CAUSEP 马拉松 CAUSE [VP 跑 [SC 张三 累了]]] (Sybesma 1999)

b. [马拉松 CAUSE [BECOME_(跑) [张三 <累了>]]] (Huang 2006)

(4) が示すように、原因型結果構文は自動詞型結果構文に軽動詞CAUSEが加えられる拡張型と考えられる。このように、Sybesma (1999) やHuang (2006) は、自動詞型結果構文を非対格の構造と分析し、原因型結果構文の成立も統一的に説明することが可能であると主張している。

ところが、自動詞型結果構文を一律に非対格の構造と分析するなら、次の(5)のような自動詞型結果構文からも(6)のように原因型結果構文が成立すると予測することになる。

(5) 花瓶 打 碎 了。

花瓶 叩く-割れる-ASP

花瓶は叩いて割れた。

►1 Sybesma (1999) では「CAUS」と表記されているが、Huang (2006) に用いられる「CAUSE」と同様な機能を果たす軽動詞である。そこで、本稿は統一を図るためHuang (2006) に従い「CAUSE」を用いることにする。

(6) *他们的争吵 打 碎 了 花瓶。

彼らの喧嘩 叩く-割れる-ASP 花瓶

(意図する意味：彼らの喧嘩が原因で花瓶が叩かれて割れた。)

原因型結果構文は、自動詞型結果構文に軽動詞CAUSEが導入され拡張された構文であると両先行研究は仮定する。すると、(5) のような自動詞型結果構文からも (6) のように原因型結果構文が成り立つと予測される。しかしながら、実際には (6) は非文となる。(5) のような自動詞型から原因型結果構文が成立しないということは後述する石村 (2011) でも述べられている。この問題に関しては、自動詞型結果構文を一律な構造と分析するSybesma (1999) やHuang (2006) では説明することはできない²。

なお、原因型結果構文 (6) が非文となるのに対し、(7) のような動作主が主語位置にくる他動詞型結果構文は成立する。このことも、動作主主語の他動詞型結果構文と原因項主語の原因型結果構文は同様な構造を持つと主張するSybesma (1999) などにとって、重大な反例となる。

(7) 张三 打 碎 了 花瓶。

張さん 叩く-割れる-ASP 花瓶

張さんは花瓶を粉々に割った。

Sybesma (1999) を始め、Sybesma・沈 (2006)、沈・司马翎 (2010)、沈・Sybesma (2012) などの一連の研究は、他動詞型結果構文 ((7) など) と原因型結果構文 ((2) など) を区別せずに同じ構造だと主張する。そして、他動詞型において主語が動作主の意味解釈が可能なのは、あくまでも百科事典的知識による解釈 (shadow interpretation) に過ぎないとする。構造上、他動詞型と原因型とは同様であり、いずれにおいても主語はVと直接意味関係を持たず、(8a) の構造が示すように軽動詞CAUSEから意味役割をもらう原因項 (cause) だと統一的に説明している。

(8) a. [CAUSEP NP [CAUSEP CAUSE [VP V [SC NP R]]]]

b. [CAUSEP 他们的争吵 [CAUSEP CAUSE [VP 打 [SC 花瓶 碎了]]]]

c. [CAUSEP 张三 [CAUSEP CAUSE [VP 打 [SC 花瓶 碎了]]]]

もし、Sybesmaらの一連の研究で主張されるとおり、他動詞型と原因型が共通の構造 (8a) を持つのであれば、(6) も (7) もそれぞれ (8b)、(8c) の構造を持ち、正しく成立するはずである。しかし、事実は上で述べたように (6) は非文となる。

他方、Huang (2006) は、Sybesma (1999) らと異なり、動作主主語の他動詞型結果構文と原因項主語の原因型結果構文の構造を、動詞Vと軽動詞との併合の仕方が違っているとして区別している。

(9) a. Causing with a manner (他動詞型)

[x CAUSE _{<v>} [BECOME [y <STATE>]]]

b. Pure causative (原因型)

[x CAUSE [BECOME _{<v>} [y <STATE>]]]

他動詞型結果構文の方は、動詞Vが軽動詞CAUSEの様態付加詞として併合する構造だとする。一方、原因型結果構文は、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合する自動詞型からの拡張型であり、軽動詞CAUSEは何も併合されない

▶2 実際、Sybesma (1999) やHuang (2006) では、自動詞型結果構文からは必ずしも原因項主語の原因型結果構文が成立しないという現象は言及されていない。

pure causativeとする。

Huang (2006) の考え方に従えば、他動詞型と原因型を区別しているため、同一の自動詞型結果構文から他動詞型結果構文と原因型結果構文がともに成立するのではないことになる。たとえば、動作主主語の他動詞型結果構文 (7) は、(10a) のように動詞V (「打 (叩く)」) が軽動詞CAUSEと併合する構造をなす。一方、pure causativeの原因型結果構文は、(10b) のように動詞Vが軽動詞BECOMEと併合する構造となる。

(10) a. [张三 CAUSE (打) [BECOME [花瓶 (碎了)]]

b. *[他们的争吵CAUSE [BECOME (打) [花瓶 (碎了)]]

もし (10a) の他動詞型結果構文と (10b) の原因型結果構文がともに成立するのであれば、それに対応する自動詞型結果構文 (5) では動詞V (「打 (叩く)」) が軽動詞BECOMEともCAUSEとも併合することになる。この構造はHuang (2006) が主張する自動詞型結果構文の構造と矛盾する。従って、Huang (2006) のように他動詞型結果構文と原因型結果構文の構造を区別するなら、(6) と (7) が示すように他動詞型と原因型が同時に成立することができないということを予測するすることができる。しかし、なぜ (5) のような自動詞型と対応するのが原因型ではなく他動詞型であるのか、言い換えれば、どのような自動詞型から原因型が成立するのかについてはHuang (2006) では言及されていない³。

さらに、原因型結果構文において、その主語が動詞Vと意味関係を持たず、pure CAUSEによって導入される原因項であるとするなら、語用論上意味解釈が可能であれば、原因型結果構文として成立すると予測することになる。

(11) a. 马拉松 跑 累 了 张三。 (2a)

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

マラソンが原因で張さんが走って疲れた。

b. *教练 跑 累 了 张三。

コーチ 走る-疲れる-ASP 張さん

コーチが原因で張さんが走って疲れた。

(12) a. 烈酒 醉 倒 了 张三。

強い酒 酔う-倒れる-ASP 張さん

強い酒が原因で張さんが酔って倒れた。

b. *郁闷的心情 醉 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う-倒れる-ASP 張さん

うっせつした気持ちが原因で張さんが酔って倒れた。

しかしながら、上の例が示すように、(11b)、(12b) は (11a)、(12a) と同様に語用論上十分あり得る状況を表しているが、原因型結果構文としては成り立たない。そこで、(11b)、(12b) が非文となるのは、語用論上の問題ではないことになる。実際、音声化されるpure CAUSEである使役動詞「使」と共起すると、(11b)、(12b) も (11a)、(12a) と同様に文法的な文となり、原因使役文が自然に成立するようになる。

►3 Cheng & Huang (1994) では (5) のような自動詞型は (1a) のような自動詞型と区別されているが、Huang (2006) ではこの区別については言及されていない。

- (13) a. 马拉松 使 张三 跑 累 了。

マラソン 使 張さん 走る-疲れる-ASP

意味：マラソンが原因で張さんが走って疲れた。

- b. 教练 使 张三 跑 累 了。

コーチ 使 張さん 走る-疲れる-ASP

意味：コーチが原因で張さんが走って疲れた。

- (14) a. 烈酒 使 张三 醉 倒 了。

強い酒 使 張さん 酔う-倒れる-ASP

意味：強い酒が原因で張さんが酔って倒れた。

- b. 郁闷的心情 使 张三 醉 倒 了。

うっせつした気持ち 使 張さん 酔う-倒れる-ASP

意味：うっせつした気持ちが原因で張さんが酔って倒れた。

(13b)、(14b) が示すようにpure CAUSEとなる使役動詞「使」を用いた構文では、原因型結果構文の原因項になれない「教练（コーチ）」「郁闷的心情（うっせつした気持ち）」も主語になりうる。(11)、(12) と (13)、(14) との対照からわかるように、原因型結果構文の原因項がpure CAUSEによって導入されるという分析は説得力を欠く。

以下3節ではこの節で指摘した問題を踏まえ、どのような自動詞型から原因型結果構文が成立可能か、そして、原因型結果構文の主語となる原因項は構造上どのような特徴を持つかについて考察を進める。

3 二種類の自動詞型結果構文と原因型結果構文の成立条件

3.1 再帰構造を持つ自動詞型結果構文

石村（2011）は自動詞型結果構文を一律に扱う先行研究（Sybesma 1999）を批判し、二種類の自動詞型結果構文を区別している。一つは動詞Vの動作主と結果述語Rの叙述対象とが一致する、または両者の間に人と体の部分という「譲渡不可能所有」の関係を表す「再帰構造を持つ自動詞型」（15a、b）である。もう一つは他動詞型からの脱使役化によって成り立つ自動詞型で、「受動型の自動詞型」（16）と呼ばれている。

- (15) a. 李四 醉 倒 了。 (石村2011：166)

李さん 酔う-倒れる-ASP

李さんが酔って倒れた。

- b. 我的肚子 吃 坏 了。 (石村2011：166)

私のお腹 食べる-壊れる-ASP

私のお腹が食べて壊れた。

- (16) 玻璃杯 打 破 了。 (石村2011：146)

グラス 叩く-割れる-ASP

グラスが叩いて割れた。

(15a) では、「酔 (酔う)」の意味上の主語と「倒 (倒れる)」の叙述対象が同一の名詞句「李四 (李さん)」によって表されている。そのため、再帰構造を持つ自動詞型結果構文とされる。また (15b) では、「吃 (食べる)」の意味上の主語 («我 (私)») と「坏 (壊れる)」の叙述対象 («肚子 (お腹)») とが (15a) のように同一の名詞句ではないが、両者の間には人と身体部分の「譲渡不可能所有」の関係が成り立っている。従って再帰的な意味構造を想定できるとし、再帰構造を持つ自動詞型とされる。一方、(16) では、V («打 (叩く)») の動作主は明示されない誰かであり、R («破 (割れる)») の叙述対象は「玻璃杯 (グラス)」である。そのため、「再帰構造の自動詞型」ではなく、他動詞型結果構文から脱使役化を経て成り立つ「受動型の自動詞型」としている。

さらに、原因型結果構文の成立条件について「再帰構造を持つ自動詞型」が要求されるということを指摘している。

(17) 这杯伏特加 醉 倒 了 李四。 (石村2011: 193)

このウォッカ 酔う-倒れる-ASP 李さん

意図する意味: このウォッカを飲んで李さんが酔いつぶれた。

(18) 那顿饭 吃 坏 了 我的肚子。 (石村2011: 189)

あのご飯 食べる-壊れる-ASP 私のお腹

意図する意味: あのご飯を食べたことが原因で私のお腹が壊れた。

(19) *这个球 打 破 了 玻璃杯。

このボール 叩く-割れる-ASP グラス

意図する意味: 誰かがこのボールを叩いたことが原因でグラスが割れた。

再帰構造を持つ自動詞型である (15a、b) からそれぞれ (17)、(18) の原因型結果構文が成立する。一方、再帰構造ではない (16) から原因型結果構文 (19) は産出されない。このように考えれば、(2a) ((20b) として再掲) のような原因型結果構文が成立するのに対し、(6) ((21b) として再掲) が成立しないことが説明できる。元となる自動詞型が「再帰構造を持つ自動詞型」であるか否かが成立条件となるのである。

(20) a. 张三 跑 累 了。 = (1a)

張さん 走る-疲れる-ASP

張さんは走って疲れた。

b. 马拉松 跑 累 了 张三。 = (2a)

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

マラソンを走ったことが原因で張さんが疲れた。

(21) a. 花瓶 打 碎 了。 = (5)

花瓶 叩く-割れる-ASP

花瓶は粉々に割れた。

b. *他们的争吵 打 碎 了 花瓶。 = (6)

彼らの喧嘩 叩く-割れる-ASP 花瓶

(意図する意味: 彼らの喧嘩が原因で花瓶を粉々に割った。)

石村 (2011) によると、(20a) は、V («跑 (走る)») の動作主とR («累 (疲

れる)」の叙述対象とが一致し、ともに「张三(張さん)」であるため、「再帰構造を持つ自動詞型」とされる。そのため、それに対応する(20b)の原因型結果構文が成立するのである。一方、(21a)はV(「打(叩く)」)の動作主は明示されない誰かである。R(「碎(割れる)」)の叙述対象は「花瓶(花瓶)」であるため、「再帰構造の自動詞型」とはならない。従って、それに対応する(21b)は原因型結果構文として成立しないとする。このように石村(2011)は、二種類の自動詞型結果構文のうち、再帰構造を持つ自動詞型のみから原因型結果構文が成り立つと主張する。そうすることで、自動詞型結果構文を一律に非対格の構造と分析するSybesma(1999)やHuang(2006)の分析で予測できない問題を正しく説明することができる。しかし、原因型結果構文の成立になぜそのような条件が必要なのだろうか。言い換えれば、なぜ再帰構造を持つ自動詞型結果構文からのみ原因型結果構文が成立するのか。再帰構造を持つ自動詞型結果構文と受動型の自動詞型結果構文はそれぞれどのような構造を持つのか。原因型結果構文は再帰構造の自動詞型結果構文からどのようなプロセスを経て成立するのか。これらの点は石村(2011)では分析が行われていない。これらのことについての議論(4節)に入る前に、次節では2節で提示した二つ目の問題に関して、原因型結果構文の成立における原因項の制限について考察する。

3.2 原因型結果構文における原因項と動詞Vとの関係

石村(2011)によると、原因型結果構文の成立には再帰構造をもつ自動詞型結果構文が要求される。しかし、再帰構造を持つ自動詞型結果構文であっても、(11)、(12)((22)、(23)として再掲)が示すように、原因項の意味特性によっては原因型結果構文として成り立たないものがある。

(22) a. 马拉松 跑 累 了 张三。

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

マラソンが原因で張さんが走って疲れた。

b. *教练 跑 累 了 张三。

コーチ 走る-疲れる-ASP 張さん

コーチが原因で張さんが走って疲れた。

(23) a. 烈酒 醉 倒 了 张三。

強い酒 酔う-倒れる-ASP 張さん

強い酒が原因で張さんが酔って倒れた。

b. *郁闷的心情 醉 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う-倒れる-ASP 張さん

うっせつした気持ちが原因で張さんが酔って倒れた。

前節で述べたように、これらの文ではいずれも語用論上の意味解釈は十分あり得る。しかし、(22a)、(23a)が成立するのに対し、(22b)、(23b)は成り立たず、原因型結果構文の原因項がpure CAUSEによって導入されるという分析は妥当性を欠く。そこで、原因項となる名詞句NPが構造上何によって制限されるのかを分析する必要が生じる⁴。

原因型結果構文が成り立つVR構造と原因項となる名詞句NPとの関係を調

▶4 原因型結果構文の原因項に関して考察した研究として、Li(1995)が挙げられる。Li(1995)は語彙的アプローチに基づき、原因項意味役割がVR構造から付与されると主張している。詳しい内容はLi(1995: 261-268)を参照されたい。ただし、Li(1995)の論述に理論的整合性が欠けることはすでに多くの研究で指摘されている(王2001、沈2004、石村2011など)。しかしながら、原因型結果構文の原因項NPがVR構造と関係し、そしてVR構造のVとの意味役割関係によって左右されることがLi(1995)から示唆されている。そこで、本稿はLi(1995)の示唆をより明確な形で論じることによって動詞Vによる原因項名詞句NPの制限を考察する。

- 5 中国語では動詞の目的語位置にくる名詞は必ずしも対象の意味役割が付与されるわけではない。例えば「吃食堂（食堂で食べる）」「切大刀（大きな包丁で切る）」などのように場所や道具も目的語位置に置くことができる。動詞から必ずしも対象意味役割を受けないが、典型的な「目的語」と同様の文法的な振る舞いを保ち、同様の統語位置（動詞の目的語位置）を占める（Barrie & Li 2015: 184-188）。中国語の文法では「V NP」は一律に「**动宾关系**（動詞目的語関係）」と扱われている。本稿も動詞Vの補語位置を占める名詞句NPを典型的、非典型的を問わず一律に「目的語」とする。

- 6 現代中国語では表現習慣や音節制限などの理由で非対格動詞それ自体ではこの枠組みに使われにくいことがある。例えば「**累于应酬**（付き合いに疲れる）」「**惊于这个事件**（この事件に驚く）」のような表現は不自然に聞こえる。ただし、「累」に対応する「**疲**」からは「**疲于应酬**（付き合いに疲れる）」、単音節の「**惊**」に対応する二音節同義語「**震惊**」からは「**震惊于这个事件**（この事件に驚く）」のような表現が自然に成立する。従って、本稿でいう「V于NP」という枠組みの文法形式にはこれらの現象も含まれる。

べると、原因項名詞句NPがVR構造の前項動詞Vによって制限されることが分かる。たとえば「走（歩く）、跑（走る）、吃（食べる）、喝（飲む）、看（見る／読む）、写（書く）、听（聞く）」などのような動作主の意志によってコントロールできる動詞（他動詞または非能格動詞）が前項動詞Vにくる場合は、原因型の主語となる名詞句NPは動詞Vの目的語になり、動詞Vと「V NP」の文法関係を持たなければならない⁵。

(24) a. 这本书 写 累 了 李四。

この本 書く-疲れる-ASP 李さん

この本が原因で李さんが書いて疲れた。

b. *出版社的催促 写 累 了 李四。

出版社の催促 書く-疲れる-ASP 李さん

出版社の催促が原因で李さんが書いて疲れた。

(25) a. 这瓶烈酒 喝 醉 了 张三。

この強い酒 飲む-酔う-ASP 張さん。

この強い酒が原因で李さんが飲んで酔った。

b. *李四不断劝酒 喝 醉 了 张三。

李さんが絶えず酒を勧めたこと 飲む-酔う-ASP 張さん

李さんが絶えず酒を勧めたことが原因で張さんが飲んで酔った。

中国語では「写这本书（この本を書く）」、「喝这瓶烈酒（この強い酒を飲む）」という表現は成立するが、「*写出版社的催促（出版社の催促を書く）」、「*喝李四不断劝酒（李さんの絶えない酒の勧めを飲む）」のような表現は成り立たない。上の例が示すように、主語位置に動詞Vの目的語になることができるNPが置かれた（24a）、（25a）の文は原因型結果構文として成立する。それに対し、主語位置に動詞Vの目的語にならないNPが置かれた（24b）、（25b）の文は非文となる。同様に、上述の（22a）が成立するのに対して、（22b）が非文となることも説明がつく。「跑马拉松（マラソンを走る）」が成立するのに対し、「*跑教练（コーチを走る）」の表現は成り立たないため、「教练（コーチ）」が原因項にならないのである。

他方、前項動詞Vが無意志動詞、たとえば「累（疲れる）、醉（酔う）、惊（驚く）、病（病気になる）」などのような経験者の意志によってコントロールできない動詞（非対格動詞）である場合はどうだろうか。これらがVR構造の前項動詞Vになる場合、原因項となる名詞句NPはVを引き起こす起因対象となり、動詞Vと「V于NP（NPにV）」という枠組みの文法関係を持たなければならない⁶。なお、「V于NP」という枠組みでは動詞Vと名詞句NPの間に前置詞「于（に）」が存在するが、文法関係から言えば、上述の「V NP」と同様に動詞と補語（目的語）の関係にあると言える。このことは、非対格動詞が起因対象と共起する場合には、日本語の「お金に困る」「事件に驚く」などの表現が示すように、後置詞句が動詞の補語（目的語）位置を占める表現が存在することから裏付けられる。上述の（23a）（（26a）として再掲）が成立するのに対し、（23b）（（26b）として再掲）が非文となるのは、次のように説明することができる。

(26) a. 烈酒 酔 倒 了 张三。

強い酒 酔う-倒れる-ASP 張さん

強い酒が原因で張さんが酔って倒れた。

b. *郁闷的心情 酔 倒 了 张三。

うっせつした気持ち 酔う-倒れる-ASP 張さん

うっせつした気持ちが原因で張さんが酔って倒れた。

中国語では「酔于酒（酒に酔う）」という表現が成立するのに対し、「*酔于郁闷的心情（うっせつした気持ちに酔う）」という表現は成り立たない。この違いが原因型結果構文の成立に関与する。(26a) は主語位置に動詞Vと「V于NP」の枠組みの文法関係が成り立つNPが置かれた文で、原因型結果構文として成立する。それに対し、(26b) は主語位置に動詞Vと「V于NP」の文法関係が成り立たないNPが置かれた文で、非文となる。

以上、この節では、二種類の自動詞型結果構文と原因型結果構文の成立条件について考察した。要約すると、原因型結果構文の成立には、まず、再帰構造をもつ自動詞型結果構文が要求される。そして次に、原因項となる名詞句NPは「V NP」、「V于NP」のような枠組みで動詞Vの補語（目的語）になるものでなければならない。このように原因項となる名詞句NPが動詞Vとの関係によって制限されるのであれば、原因項が何も併合されないpure CAUSEによって導入されるという分析は妥当性に欠けることになる。以下4節では、ここで考察した二つの言語事実を踏まえ、原因型結果構文の成立にはなぜそのような条件が要求されるのかを考察し、自動詞型結果構文と原因型結果構文の形成と構造についてさらに分析を進める。

4 軽動詞併合に基づいた新たな構造の分析

この節では、前節で挙げた言語事実を踏まえ、中国語の自動詞型結果構文と原因型結果構文の形成と構造について考察する。まず、自動詞型結果構文を、その主語NPが動詞Vと構造上の関係を持たず、一律に非対格の構造と分析するSybesma (1999) やHuang (2006) と異なり、本稿は主語NPと動詞Vとの関係を構造分析に取り入れる必要があることを主張する。石村 (2011) で考察された再帰構造を持つ自動詞型結果構文（例27a、b）は、主語名詞句が結果述語と叙述関係を持つほか、動詞Vと「動詞Vの主体、または主体の体の部分」といった意味関係を持つ。そのため、このタイプの自動詞型結果構文では、動詞Vが、主語名詞句と局所的（local）関係を持つ軽動詞BECOMEと併合すると考えられる。局所的関係は θ 役割を付与する要素とその θ 役割を受け取る要素が占める構造上の関係である（中村ほか2001：78）。そのため、動詞VがBECOMEと併合し、それらの局所的関係によって動詞Vと主語名詞句との意味関係が保たれる。そうすると、再帰構造を持つ自動詞型結果構文はHuang (2006) が主張する非対格の構造をなす自動詞型結果構

- ▶7 中国語では動詞V（非能格動詞か非対格動詞にかかわらず）が軽動詞BECOMEと併合することが可能なことに関してはHuang（2006）を参照されたい。
- ▶8 このタイプの自動詞型結果構文には「手帕哭湿了。（ハンカチが泣いて濡れた）」のように主語名詞句「手帕（ハンカチ）」と動詞V「哭（泣く）」は明らかに意味関係を持たない場合がある。従って、(28)においても主語名詞句「玻璃杯（グラス）」は動詞V「打（叩く）」と意味関係を持たないと考えることが可能である。
- ▶9 構造上に「Φ」の外項（例えば空代名詞pro）があるなら、proが主語になり、目的語は主語にならないはずだという指摘もある。つまり、(28)のような結果構文は「花瓶_{pro}打碎了_t」のようにみなすのである。しかし、(28)タイプの結果構文では、文頭の名詞句が主題ではなく主語だということはすでにCheng & Huang（1994：208-211）で検証されている。詳しくはCheng & Huang（1994：208-211）を参照されたい。また、「VP内主語仮説を採った場合には、文主語位置に目的語など主語以外の要素が出現しても、本来の主語を基底位置に生起されておくことができる。これにより、従来、レキシコン内で充足されるために統語構造上には投射されない」と仮定された含意的外項（implicit external argument）を、統語的にも実在するものとして議論することが可能となる。」（藤田・松本2005：97）との主張もある。よって、本稿で扱う(28)タイプの結果構文の構造に「Φ」となる外項が存在し、目的語の名詞句が主語になるということは理論的に可能であろう。
- ▶10 動作主の存在を明示する語句（たとえば意図を表す副詞「intentionally」など、目的を表す不定詞節など）と共起しないことから、中間構文の持つ含意的動作主は統語構造上は存在せず、語彙意味的にのみ存在すると主張する立場もある。一方、意図を表す副詞や目的を表す不定詞節と共起しないことから、構造上に動作主が存在しないということは言えないとの反論もあり、中間構文にも構造上動作主が存在すると主張する立場もある。具体的には影山（2001：184-192）、藤田・松本（2005：94-122）及びそれらで挙げられた参考文献を参照されたい。本稿は影山（2001）や藤田・松本（2005）と同様に後者の立場を支持することを前提に、議論を行う。

文に当たる。このタイプの自動詞型結果構文についてはHuang（2006）の分析を踏襲する⁷。

(27) a. 张三 醉 倒 了。

張さん 酔う-倒れる-ASP

張さんは酔って倒れた。

[BECOME_{〈酔〉} [张三 <倒了>]]

b. 我的肚子 吃 坏 了。

私のお腹 食べる-壊れる-ASP

私のお腹は食べて壊れた。

[BECOME_{〈吃〉} [我的肚子 <坏了>]]

一方、受動型の自動詞型結果構文（28）は、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合せず、CAUSEと併合する構造をなすと主張する⁸。

(28) 玻璃杯 打 破 了。

グラス 叩く-割れる-ASP

グラスは叩いて割れた。

[Φ CAUSE_{〈打〉} [BECOME [玻璃杯 <破了>]]]

(28)タイプの自動詞型結果構文は、軽動詞CAUSEが含まれ、さらに音形的に表現されない「Φ」の外項が含まれる構造をなす⁹。(28)のタイプの自動詞型結果構文の構造で動詞Vが軽動詞BECOMEと併合せず、CAUSEと併合することを支持する証拠は後述の原因型結果構文の構造を議論する際に提示する（例（35）を参照）。ここではまず、(28)のタイプの自動詞型結果構文の構造に「外項」が存在することを支持する事実を提示する。

主語名詞句それ自体が起因となり、構造上の外項（外的原因）が存在しない例として、英語の能格動詞「break」、日本語の反使役化の自動詞（影山1996の呼び方）「割れる」、中国語の状態変化の非対格自動詞「破（割れる）」（徐2001）などが挙げられる。これらの動詞は以下の例が示すように、外的原因の不在を明記する表現「all by itself、自分で／勝手に、自己」と共起することができる（影山1996：151、189、藤田・松本2005：118、Huang 2015：7など）。

(29) a. The glass broke all by itself.

b. グラスが勝手に割れた。

c. 玻璃杯 自己 破 了。

グラス 自分で／勝手に 割れる-ASP

一方、主語名詞句それ自体は起因せず、構造に外項が存在する場合、動詞は外的原因の不在を表す「all by itself、自分で／勝手に」とは共起しないと言われている（影山1996、藤田・松本2005など）。たとえば、英語の中間構文では対象が主語になり、動作主は文の表面に現れないが、構造上存在する¹⁰。そのため、(30a)のように「all by itself」と共起しない（藤田・松本2005：118）。また、対象が主語になる日本語の「てある」構文においても動作主は表面上姿を現さず、統語構造にゼロの形式で存在する（影山1996：187）。そのため、(30b)のように「自分で／勝手に」とは共起しない。

(30) a. *This boat sinks easily all by itself.

b. *窓が勝手に壊してある。

これらのことを踏まえると、もし (28) のタイプの自動詞型結果構文において対象が主語になり、構造上ゼロ形態の外項が存在するという本稿の分析が正しいとするなら、(28) のような自動詞型結果構文は、英語の中間構文や日本語の「てある」構文と同様に、外項（外的原因）の存在を否定する「自己（自分で／勝手に）」と共起しないことになる。

(31) *玻璃杯 自己 打 破 了。

グラス 自分 叩く-割れる-ASP

グラスは勝手に叩いて割れた。

事実は予測の通りで、(28) の自動詞型結果構文は、(31) が示すように「自己（自分で／勝手に）」と共起することはできない。

以上、要約すると、(28) のタイプの自動詞型結果構文の構造は、(31) が示すように「自己（自分で）」と共起しない。これにより、このタイプの結果構文は、BECOMEだけが含まれる非対格の構造ではなく、動詞Vが外項（外的原因）を導入する軽動詞CAUSEと併合している構造であると考えられる。本稿は石村（2011）に従い、この種の構文を「受動型の自動詞型結果構文」と呼ぶ¹¹。

次に、原因型結果構文の形成については、動詞VがBECOMEと併合してからさらにCAUSEに上昇するというプロセスを仮定し、次のように提示する。

(32) 马拉松 跑 累 了 张三。

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

[马拉松 CAUSE<跑> [BECOME<跑> [张三<累了>]]]

この構造によって、石村（2011）が提案する「原因型結果構文の成立に再帰構造を持つ自動詞型結果構文が要求される」という原因型結果構文の成立条件を説明することができる。(32) が示すように、原因型結果構文の成立過程で、動詞Vは最初に軽動詞BECOMEと併合する。また、(27a、b) で示したように、再帰構造を持つ自動詞型結果構文は、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合する非対格の構造をなす。そのため、再帰構造を持つ自動詞型結果構文からは原因型結果構文が成立可能となる。一方、上で議論したように、(28) タイプの受動型の自動詞型結果構文の構造にはゼロ形態の外項が存在し、動詞Vが外項を導入する軽動詞CAUSEと併合する。従って、受動型の自動詞型結果構文では動詞VがそもそもBECOMEと併合しないため、原因型結果構文は成立不可能となるのである。

そして、この構造を仮定することで、原因型結果構文の原因項となる名詞句NPは動詞Vの補語（目的語）でなければならないということを構造的に説明することができる。BECOMEと併合した動詞Vは、さらに軽動詞CAUSEに上昇するというプロセスが仮定されている。そのため、原因項となるNPはpure CAUSEによって導入されるのではなく、動詞Vが併合した軽動詞CAUSEによって導入されたものと考えられる。そこでは、原因項名詞句NPが動詞Vと構造上、局所的（local）な関係を持つことになる。従って、動詞Vと構造上、

►11 Cheng & Huang (1994 : 208) ではこのタイプの結果構文は受身文マーカー（被）のない擬似受動型の結果構文（pseudo-passive resultative）と呼ばれ、一種の中間構文とみなすことができると指摘されている。

局所的関係を持つ原因項NPは動詞Vによって制限され、動詞Vと文法的関係を持たなければならないのである。たとえば、上述 (22a、b) ((33a、b) として再掲) は次のような構造を持つとみなすことができる。

(33) a. 马拉松 跑 累了 张三。

マラソン 走る-疲れる-ASP 張さん

マラソンが原因で張さんが走って疲れた。

[马拉松 CAUSE _{〈跑〉} [BECOME _{〈跑〉} [张三 <累了>]]]

局所的関係

b. *教练 跑 累了 张三。

コーチ 走る-疲れる-ASP 張さん

コーチが原因で張さんが走って疲れた。

[*教练 CAUSE _{〈跑〉} [BECOME _{〈跑〉} [张三 <累了>]]]

局所的関係

(33a) が示すように、BECOMEからCAUSEに上昇してきた動詞V (「跑 (走る)」) は、原因項NP (「马拉松 (マラソン)」) と局所的関係を持つ。そして「跑 马拉松 (マラソンを走る)」という表現が成立するように、この場合の動詞V (「跑 (走る)」) と原因項NP (「马拉松 (マラソン)」) には意味役割関係が保たれる。従って、原因型結果構文として成立するのである。一方、(33b) においても動詞V (「跑 (走る)」) と原因項NP (「教练 (コーチ)」) が同様に局所的関係を持つ。しかしながら、「*跑教练 (コーチを走る)」という表現は成り立たず、意味役割関係が保たれない。そのため (33b) は原因型結果構文の構造からは産出されず、原因型結果構文として非文となるのである。

以下、ここで提案する構造は理論的にも経験的にも支持されることを述べる。まず、軽動詞理論では、音声を持たない軽動詞 (空動詞、またはゼロ動詞とも呼ばれる) は文中で音韻形態的に独立して存在することができず、動詞の移動を引き起こし、音声化するとされる¹²。そこで、原因型結果構文の構造にある軽動詞CAUSEが何も併合されないpure CAUSEであるという主張は、軽動詞理論に従って考えると望ましくない仮説といわざるを得ない。音声を持たない軽動詞CAUSEは音声化する必要があるのである。従って、BECOMEと併合したVがさらにCAUSEに移動して併合するというプロセスは、軽動詞の音声化による自然な操作であると考えられる。

なお、軽動詞の音声化要求の仮説に従って考えれば、上で提案した (28) のような受動型の自動詞型結果構文の構造において、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合しないという分析には問題があるように見られる。ここでは、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合するか否かに関わらず、小節内にある結果述語「R」が動詞Vと複合し「VR」構造になるために、軽動詞BECOMEと併合するということを指摘する。結果述語になるのはほとんどが形容詞である (朱 1982)。しかし、「変化」の意味が語彙的に含まれず、恒常な状態を表す形容詞は、「*刷雪白了 (雪白に塗った)」が非文法的になるように結果述語になることはできない。結果述語になる形容詞は、「白了 (白くなった)」が示すよう

►12 音声を持たない軽動詞が接辞 (affix) または束縛形態素 (bound morpheme) に属し、音韻形態的に独立して存在することができず、動詞の移動を牽引して音声化する必要があるという観点は、Larson (1988) が英語の二重目的語構文の分析で提示している。その後、Hale & Keyser (1993) やChomsky (1995) などによってミニマリスト・プログラムの重要な理論においても仮定されている。軽動詞は音声化する必要があり、主要部移動 (または動詞移動) を引き起こすという特徴に注目し、中国語の文法を分析する研究も数多く見受けられる (Huang (1997)、黄 (2008)、冯 (2000、2005) など)。

に「変化」の意味が語彙的に含まれるものに限られる(張1995、2006)。結果述語がBECOMEと併合するということを考えれば、変化の意味が語彙的に含まれない形容詞はBECOMEと性質的に整合性がないため、結果述語になることができないと考えられる。従って、(28)のタイプの自動詞型結果構文において、動詞VがBECOMEと併合していなくとも、結果述語「R」がBECOMEと併合するため、BECOMEの音声化要求には違反していないと言える。

次に、ここで提案する原因型結果構文の形成と構造を支持する経験的事実として、音声を持つ軽動詞「使」構文との対照が挙げられる。もしBECOMEと併合したVがCAUSEに上昇しないとすれば、音声化された「使」がpure CAUSEの音声実現として挿入される。すでに述べたように、pure CAUSEの「使」構文では、原因項NPは動詞Vと文法的関係を持つ必要はない。このことは原因型結果構文と対照的である。

(34) a. 马拉松 使 张三 跑 累 了。

マラソン 使 張さん 走る-疲れる-ASP

b. 教练 使 张三 跑 累 了。

コーチ 使 張さん 走る-疲れる-ASP

[马拉松 / 教练 CAUSE(使) [BECOME_(跑) [张三 <累了>]]]

すでに述べたように、原因型結果構文では動詞Vが原因項と局所的関係を持つため、原因項NPが動詞Vによって制限される。(33b)では「*跑教练(コーチを走る)」が成り立たないため、「教练」は原因項とならない。そのため(33b)は原因型結果構文として非文となるのである。それに対し、(34)が示すようにpure CAUSEの「使」構文では、原因項となるNPは動詞Vと局所的な関係を持たないため、動詞Vによる制限はない。そこで、(33)の原因型結果構文の主語となれない「教练(コーチ)」も、(34b)のようにpure CAUSEの「使」構文の主語になることができる。

また、ここでの分析は、上で提案した受動型の自動詞型結果構文の構造からも傍証が得られる。すでに提示したように、受動型の自動詞型結果構文では動詞VがCAUSEと併合する。この点は原因型結果構文の構造と共通する。ただし、受動型の自動詞型結果構文(たとえば(28))では、動詞VはBECOMEと併合せずに、最初からCAUSEと併合すると分析される。もしこの分析が正しいとするなら、受動型の自動詞型結果構文にはpure CAUSEを表す「使」を導入することができないことになる。

(35) (张三/这把铁锤) *使 玻璃杯 打 破 了。

(張さん/この金槌) 使 グラス 叩く-割れる-ASP

(35)が示すように、受動型の自動詞型結果構文が「使」構文の補語になることができないという事実は、王(2001:68)でも指摘されている。

以上、本節では軽動詞併合分析を応用し、中国語結果構文の形成と構造について分析を行った。自動詞型結果構文は、動詞Vが軽動詞BECOMEとCAUSEのいずれかと併合するかによって二種類の異なる構造をなすと分析した。原因型結果構文に関しては、軽動詞BECOMEと併合したVがさらにCAUSEに上昇するというプロセスを仮定した。本稿で提案した構造分析は、先行研究の考察で問題となってきた言語事実を自然に説明することができる。そして理

論的にも経験的にも支持された妥当性の高い考察であると主張したい。

5 | まとめ

本稿は自動詞型結果構文と原因型結果構文を中心にそれぞれの形成と構造について軽動詞併合の観点から分析を進めた。自動詞型結果構文は二種類に分かれる。そして再帰構造を持つ自動詞型結果構文のみから原因型結果構文が成り立つという石村（2011）で観察された言語事実に加え、さらに原因型結果構文の原因項となる名詞句NPが動詞Vによって制限されるということを本稿は明らかにした。これらの言語事実を踏まえて、Huang（2006）が主張する軽動詞併合分析の提案をさらに推し進め、結果構文の主語名詞句NPと動詞Vとの意味関係が軽動詞の併合分析に関与することを主張した。自動詞型結果構文については、動詞Vが軽動詞BECOMEと併合する非対格構造をなす自動詞型と、動詞Vが軽動詞CAUSEと併合する受動型の自動詞型の二種類の構造を仮定した。さらに、原因型結果構文の成立に関しては、pure CAUSEによって原因項が導入されるという先行研究の分析を批判し、軽動詞BECOMEと併合した動詞Vがさらに軽動詞CAUSEに上昇するというプロセスを仮定した。本稿で提案した新たな構造の分析を通して、これまで問題となってきた言語事実を自然に説明することができた。そして、音声を持たない軽動詞は音声化する必要があり、動詞の移動を引き起こすという軽動詞理論の主張と、本稿が提案した構造の分析は合致し、理論的に合理的な帰結を導き出した。さらに、音声を持つpure CAUSEの軽動詞「使」の構文との対照からも本稿の提案が経験的にも支持されることを主張した。

謝辞

本稿執筆にあたり、終始懇切丁寧なご指導をいただきました奥聡先生に心より感謝致します。また、大野公裕先生には草稿の段階から貴重なコメントをいただきました。山下好孝先生には、論文の日本語表現について丁寧にご修正いただきました。そして、査読を担当してくださった匿名の2名の先生方から大変有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝致します。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- Barrie, Michael and Li, Audrey (2015) Analysis versus Synthesis: Objects. In: Li, Audrey. Simpson, Andrew and Dylan Tsai, Wei-Tien (eds.) *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, pp.179-206. Oxford: Oxford University Press.
- Cheng, Lisa Lai-shen and Huang, C.-T. James (1994) On the Argument Structure of Resultative compounds. In: Mathew Chen and Ovid Tzeng (eds.) *Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, pp.187-221. Pyramid Press, Taipei.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press. (外池滋生、大石正幸 (1998) 訳『ミニマリスト・プログラム』翔泳社.)

- 冯胜利 (2000) 「“写毛笔”与韵律促发的动词并入」『语言教学与研究』第1期、pp.25-31.
- 冯胜利 (2005) 「轻动词移位与古今汉语的动宾关系」『语言科学』第4卷第1期、pp.3-16.
- 藤田耕司・松本マスミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』研究社.
- Hale, Kenneth and Keyser, Samuel Jay (1993) On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations. In: Hale, Kenneth and Keyser, Samuel Jay (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp.53-109. Cambridge: MIT Press.
- Huang, C.-T. James (1997) On Lexical Structure and Syntactic Projection. *Chinese Languages and Linguistics* (3), pp.45-89.
- Huang, C.-T. James (2006) Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View. 『中国語学』253、pp.1-43.
- Huang, C.-T. James (2015) On Syntactic Analyticity and Parametric Theory. In: Li, Audrey. Simpson, Andrew and Dylan Tsai, Wei-Tien (eds.) *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, pp.1-47. Oxford: Oxford University Press.
- 黄正德 (2008) 「从“他的老师当得好”谈起」『语言科学』第7卷第3期、pp.225-241.
- 石村広 (2011) 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から—』白帝社.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 『動詞の意味と構文』大修館書店.
- Larson, Richard K. (1988) On the Double Object Construction. *Linguistic Inquiry* 19, pp.335-391.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge MA, MIT Press.
- Li, Yafei (1995) The Thematic Hierarchy and Causativity. *Natural Language & Linguistic Theory* 13, pp.255-282.
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (2001) 『生成文法の新展開』研究社出版.
- Simpson, Jane (1983) Resultatives. In: L. Levin et al. (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, pp.143-157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Sybesma, Rint (1999) *The Mandarin VP*. Kluwer Academic Publishers.
- Sybesma, Rint, 沈阳 (2006) 「结果补语小句分析和小句的内部结构」『华中科技大学学报 (社科版)』第41期、pp.40-46.
- 沈阳、司马翎 (2010) 「句法结构标记“给”与动词结构的衍生关系」『中国语文』第3期 (总第336期)、pp.222-237.
- 沈阳, Sybesma, Rint (2012) 「作格动词的性质和作格结构的构造」『世界汉语教学』第26卷第3期、pp.306-321.
- 沈家煊 (2004) 「动结式“追累”的语法和语义」『宁夏大学学报』06期、pp.32-34.
- 王玲玲 (2001) 「漢語動結結構句法與語義研究」香港理工大学博士論文.
- 徐杰 (2001) 『普遍语法原则与汉语语法现象』北京大学出版社.
- 张国宪 (1995) 「现代汉语的动态形容词」『中国语文』第3期、pp.221-229.
- 张国宪 (2006) 『现代汉语形容词功能与认知研究』商务印书馆.
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』商务印书馆.

(平成28年10月24日受理、平成29年1月13日採択)